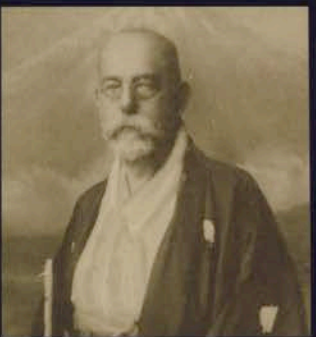




日独交流史編集委員会 編



日独交流 150年の軌跡



雄松堂書店



日独交流史編集委員会

ペーター・パンツァー (Peter PANTZER / ホン大学名誉教授)

久留島浩 (Hiroshi KURUSHIMA / 国立歴史民俗博物館教授)

保谷 徹 (Toru HOYA / 東京大学史料編纂所教授)

箱石 大 (Hiroshi HAKOISHI / 東京大学史料編纂所准教授)

宮田奈々 (Nana MIYATA / オーストリア国立アカデミー近現代史研究所客員研究員)

日独交流 150 年の軌跡

2013年10月3日 発行

編 集 日独交流史編集委員会

発 行 者 新田満夫

発 行 所 株式会社 雄松堂書店

〒160-0002 東京都新宿区坂町27番地
営業 03-3357-1446 編集 03-3357-1449

印刷・製本 (株)ジェイアイ (株)平河工業社

日独交流史編集委員会

ペーター・パンツァー (Peter PANTZER / ボン大学名誉教授)

久留島浩 (Hiroshi KURUSHIMA / 国立歴史民俗博物館教授)

保谷 徹 (Toru HOYA / 東京大学史料編纂所教授)

箱石 大 (Hiroshi HAKOISHI / 東京大学史料編纂所准教授)

宮田奈々 (Nana MIYATA / オーストリア国立アカデミー近現代史研究所客員研究員)

表紙人物：左上より時計回りに

ヴィルヘルム一世 / 星一 / ヤコブ・メッケル / オイレンブルク伯爵 / ロベルト・コッホ /
ローレンツ・フォン・シュタイン / 徳川家茂 / 伊藤博文 / シーボルト / 貞奴 / 青木周蔵と娘ハナ、
孫娘ヒッサ / 杉原千畝 / クリステリアン・バンザ / 森鷗外、ヴィルケ、ヴァールヴェルグ

裏表紙絵：アルベルト・ベルク画、「江戸の大通り」(『オイレンブルク日本遠征記』より)

目次

ご挨拶	iii
フォルカー・シュタンツェル（駐日ドイツ連邦共和国大使）	
『日独交流 150 年の軌跡』出版に寄せて	iv
古森重隆（全国日独協会連合会、公益財団法人日独協会会長）	
『日独交流 150 年の軌跡』出版に寄せて	v
ルプレヒト・フォンドラン（独日協会連合会会長）	
ハインリヒ・ゼーマン（元駐インドネシアドイツ連邦共和国大使、2005/06 年日本におけるドイツ年特別大使）	

1 日独交流の嚆矢

1.1	ベーター・バンツァー オイレンブルク使節団と日独関係の樹立	3
1.2	中村尚明 將軍への贈り物——徳川記念財団所蔵のプロイセン王立磁器製作所（KPM）製リトファニーについて	18
1.3	ロルフ＝ハラルド・ヴィッピヒ プロイセンにおける竹内使節団——ドイツの地を踏んだ最初の日本人	31
1.4	レギーネ・マティアス ハンザ諸都市と日本	35
1.5	箱石 大 戊辰戦争とプロイセン	39
1.6	カティヤ・シュミットポット 第一次世界大戦以前の独日貿易	46

2 日独交流の黄金時代

2.1	スヴェン・サーラ 日独関係の「黄金時代」	53
2.2	久米邦貞 ドイツに目を開いた日本——エッセンとベルリンにおける岩倉使節団	61
2.3	ニクラス・サルム＝ライファーシャイト伯爵 青木周蔵——ドイツと日本の橋渡しをした外交官	66
2.4	瀧井一博 明治憲法の制定とドイツの影響	70
2.5	トビアス・エルンスト・エシュケ ヤコブ・メッケル少佐——お雇い外国人、プロイセン参謀将校	77
2.6	マティアス・ヒルシュフェルド 行進曲と神々の煌めき——日本の西洋音楽の草創期におけるドイツの役割	83

2.7	エーリッヒ・パウアー 自然科学と技術分野における日独の学問移転：第一次世界大戦まで	88
2.8	フランク・ケーザー ドイツを模範とした日本の医学	93
2.9	スザンネ・ゲルマン エルヴィン・ベルツ——日本近代医学の父	99
2.10	ベアーテ・ヴォンデ 森鷗外と独日文化の橋渡し役	102
2.11	ベーター・パンツァー ドイツにおけるジャポニスム——芸術と好奇心の間にある日本への熱狂	111
2.12	ゲルハルト・クレープス 日本の俘虜収容所における青島の守備兵たち	123
2.13	ハインリヒ・ゼーマン 明治日本はドイツだけを手本としていたのか	130

3 学術交流・日本研究

3.1	ヴォルフガング・サイフェルト ドイツにおける日本学・日本研究	137
3.2	デートレフ・ハーバーラント ヴァレニウス、カロン、ケンヘル——シーボルト以前にヨーロッパにおける日本理解を深めた人々	143
3.3	コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトと日本開国への影響	148
3.4	レギーネ・マティアス ルール大学ポーフムのシーボルト・アーカイブズ	154
3.5	宮坂正英 梶秀三のシーボルト研究	157
3.6	ハルトムート・ヴァールラーヴェンス 世紀転換期の日本人によるドイツ像——1900年から1902年のベルリンにおける巖谷季雄	166
3.7	エーリッヒ・パウアー 日独学術交流の再出発——2人のノーベル賞受賞者 アルベルト・アインシュタインとフリッツ・ハーバー	171
3.8	スヴェン・サーラ／クリスティアン・W. シュバング／ロルフ＝ハラルド・ヴィッピヒ ドイツ東洋文化研究協会（OAG）	175
3.9	トム・グリグル グラッシ民族学博物館所蔵の徳川家の能面——旧ドイツ東洋文化研究協会コレクション	178
3.10	ラインハルト・ツェルナー ボン大学日本・韓国研究専攻所蔵のトラウト・コレクション	181

4 ヴェルサイユ条約から第二次世界大戦まで

4.1	テオ・ゾンマー 両大戦の間——ヴェルサイユ条約から日独同盟、そして総力戦へ	187
-----	--	-----

4.2	宮田奈々 第一次世界大戦後のドイツ国境画定問題と日本委員	197
4.3	フランク・ケーザー ヴィルヘルム・ゾルフ——第一次世界大戦後の初代駐日ドイツ大使	201
4.4	小田博志 ハンス・バーシェと日本——国境を越えたつながりの物語	204
4.5	平山 洋 ドイツ哲学と近代日本	210
4.6	田中祐介 ドイツ語が輝いたとき——大正・昭和戦前期の旧制高等学校におけるドイツの言語と文化の影響	217
4.7	田嶋信雄 日本から見た防共協定	223
4.8	安松みゆき 1939年の「伯林日本古美術展覧会」について——開催経緯と日独双方の思惑	231
4.9	ジャンニース・ハンセン 「武士の娘」(邦題：新しき土)——日独合作映画で交わる芸術とプロパガンダ	239
4.10	イングリッド・フリッチュ リヒャルト・シュトラウス——大管弦楽のための日本の皇紀二千六百年に寄せる祝典曲	244
4.11	ハインツ・エーバーハルト・マウル 杉原千畝とユダヤ人迫害問題——反ユダヤ人種政策への同調を拒否した日本	248

5 戦後の日本とドイツ

5.1	ハインリヒ・ゼーマン 辿ってきたのは同じ道のりか——第二次世界大戦後のドイツと日本、その復興の歩み	255
5.2	石田勇治 「過去の克服」——ドイツと日本を分ける要因	265
5.3	ホルガー・レット コンラート・アデナウアーの訪日——政治と文化の視点から見たある旅の記録	270
5.4	ベーター・パンツァー 日本とドイツ民主共和国 (1973-1989年)	274
5.5	黒川 剛 日独関係の歴史と日独協会の歩み	278
5.6	ルブレヒト・フォンドラ 雨天の友——独日協会と協会の課題	282
5.7	ダヴィッド・ベンダー ドイツにおける日本の武道の伝播と育成	287
5.8	ジャクリース・ベルント マンガに見る「ドイツ」——パロディ・ツールとしての役割	292

6 未来へ

6.1	ルプレヒト・フォンドラン 将来の日独アジェンダに取り上げるべきものは何か	301
6.2	フリデリーケ・ボッセ 財団法人ベルリン日独センター	307
6.3	ハンス＝エルク・シュテーレ 日本とドイツ—学術・科学技術協力	310
6.4	ユリア・ホルマン 日本とドイツ—われわれの経済協力のための課題	314
	図版一覧	319
	あとがき	337
	執筆者・翻訳者一覧	339

森鷗外と独日文化の橋渡し役

ベアーテ・ヴォンデ (Beate WONDE)



94 フォルカー・ポーレンツ「森鷗外のアウアーバッハス・ケラーでの1885年12月27日の回想」(森鷗外が、医学生時代の自分と井上哲次郎がファウストの翻訳について談話した時のことを回想した図。後ろにメフィスト、ファウスト) アウアーバッハス・ケラー (ライプツィヒ) の壁画【アウアーバッハス・ケラー所蔵】 © Volker Pohlenz

日本の近代史において最も影響力があり、多方面に秀でていた人物の中に、まず森鷗外が挙げられる。鷗外は数多くのペンネームを持っていたが、「森鷗外」はその中でも最も頻繁に用いられたもので、この名でもって彼は日本の文化史・文学史に残る人物となった。「鷗 (カモメ)」と「外」という漢字の組み合わせからは、さまざまな制約を受けながらも、精神的な高みに昇って行こうとする、鷗外の生きる姿勢が感じられる。

森鷗外は、いかなる条件、困難をばねにして、日独文化

の、さらにはドイツ語を介した日欧文化の橋渡しのシンボルとなったのか。並外れた語学力と知性、使命感を持ち、歴史的大変革期の様々な課題に全力で臨んだ彼は、一体どのような人物だったのか。

鷗外 (本名、森林太郎) が誕生したのは1862年 (文久2年)、それは日本・プロイセン修好通商条約が結ばれ、その施行を前にした年のことだった。故郷の津和野において、幼少期の林太郎は論語などの漢籍の素読の訓練を受け、文章を叙述する上で守らなければならない規則と柔軟な言語思考について学んだが、これはまさに、将来の翻訳家にと

っては欠かせない、貴重な経験であったと言えるだろう。1871年（明治4年）の廃藩置県に伴い、林太郎は父と共に上京する。伝統的な医師の家系に生まれた林太郎は、1873年（明治6年）に開設されたばかりの東京医学校予科（後の東京大学医学部）に入学し、持ち前の勤勉さを存分に発揮し、そこでドイツ人医師エルヴィン・ベルツ（Erwin Baelz）やアウグスト・ヴィルヘルム・シュルツェ（August Wilhelm Schultze）から、卒業する1881年（明治14年）までドイツ語とラテン語で医学の基礎を学ぶ。一方、かつて学んだ漢詩の教養を駆使して、ドイツの作家ヴィルヘルム・ハウフ（Wilhelm Hauff）の詩を「盗侠行」（*Karawane*）という邦題の漢詩に訳した。これは彼にとって最初の文学の翻訳だった。

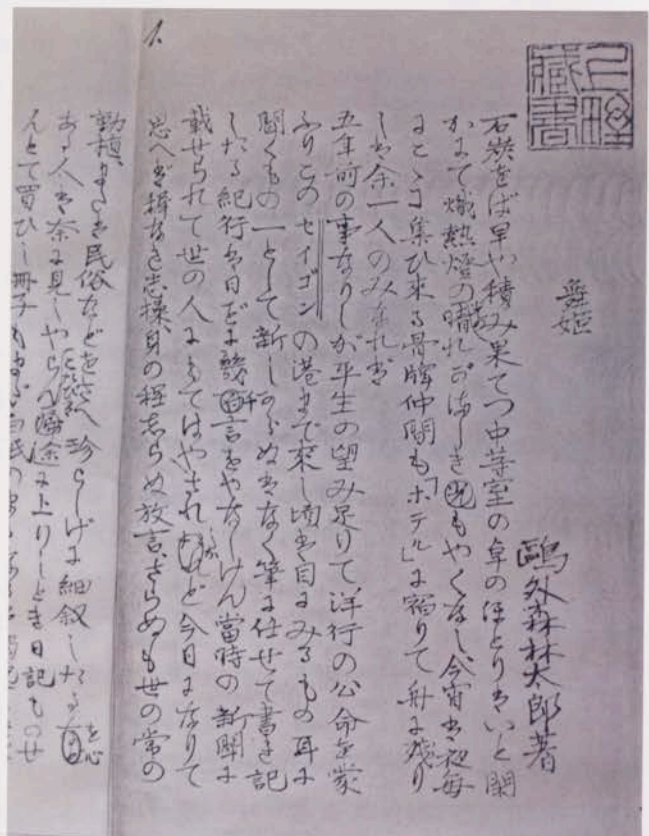
この医学校は、14歳以上でないと入学が許可されないという規則があったため、年齢を2歳も多く偽り実際には12歳で入学した。早熟な林太郎は、同級生より年下であったにも関わらず、常に学年上位の成績を保ち続けていたが、いくつかの不運が重なって、19歳で本科を卒業した時の席次は8位だった。ヨーロッパへの留学を熱望していた彼は、文部省に派遣留学生となるための願書を出したが、上位二人までという条件により選考に漏れてしまった。同年に陸軍省に就職し軍医になる。

そして、陸軍の軍医として晴れてドイツ留学を命じられた22歳の鷗外は、1884年（明治17年）8月24日に横浜港を出発し、およそひと月半の船旅を経てマルセイユに到着し、10月11日朝7時に、ついにドイツ・ケルンの中央駅に降り立った。駅の構内でドイツ語のアナウンスを聞いたときの気持ちを、鷗外は『航西日記』に次のように綴っている。「達德國歌倫。余解德國語。來此。得免聾啞之病。可謂快矣。午後八時三十分。至伯林府」（ドイツのケルンに到着する。ここに来てドイツ語が理解できる。言葉が理解できない、話せない状態から解放されて快感だ。午後八時三十分、ベルリンに到着する）。

それから4年間にわたるドイツ滞在について記された『獨逸日記』（1884年から1888年まで）は、今日の日本人にとっては必ずしも読みやすい文章ではないかもしれないが、それでもなお、明治時代の一人の日本人がどのようにドイツを理解していたかについて、最も詳しく、生き生き

と伝える記録である。

ドイツに到着してすぐの1884年10月13日の日記には、特命全権公使青木周蔵に会い、これから始まる留学生活について助言を得たというエピソードが、次のように記されている。「公使のいはく（中略）學問とは書を讀むのみをいふにあらず。歐洲人の思想はいかに、その生活はいかに、その禮儀はいかに、これだに善く觀ば、洋行の手柄は充分ならむといはれぬ」。青木の言葉をしっかりと肝に銘じた鷗外は、あらゆる階層の人間と交流し、目新しいものや、変わったもの、これからの祖国のため、祖国の人々のため、そして自らの人生に役立つであろうと思ったこと全てを吸収していった。新しいことを学ぶには、まず観察し、順応し、そして模倣することが必要だが、鷗外がこれらを完璧にこなしていたことは、体格調査のために熊本を訪れたベルツの次のような発言からも読み取れる。「その物言ひから、動作までドイツ人そっくりだよ。森といふ男は實は智慧の満ち満ちた立派な頭をもっている。どうしても只の日



95 『舞姫』の直筆原稿（複製）〔フンボルト大学ベルリン森鷗外記念館所蔵〕



96 森鷗外（後列左から一人目）と医者の同僚、ベルリンにて〔フンボルト大学ベルリン森鷗外記念館所蔵〕 © MOG Berlin / 山根寿代

本人ではないネ」（山田弘典『軍醫森鷗外』近代作家研究叢書120、日本図書センター、1992年、100頁）。

鷗外は自分自身の「ドイツ人的」な面を、注目を集めたいときや、逆に他者と距離を置きたいときなどに上手く利用して、ドイツの文化や精神史の日本における第一人者としての地位を確立させた。しかし、そうした態度にも関わらずやはり鷗外は自分を日本人だと意識していた。彼はただ無闇にドイツを崇拜してはおらず、目指していたのはドイツと日本の優れた面をかけ合わせた知の集大成だった。

ドイツに着いた鷗外はまずライプツィヒ、ドレスデンに赴き、さらにミュンヘンのマックス・フォン・ペッテンコーファー（Max v. Pettenkofer）およびベルリンのロベルト・コッホ（Robert Koch）のもとで衛生学と軍人衛生学を勉強した。1885年8月13日、ドイツで暮らし始めて10ヵ月が経った頃、鷗外は日記に「……架上の洋書は已に百七十餘巻の多きに至る。鎖校以来、暫時閑暇なり。手に

随ひて繙閱す。その適宜ふ可からず。濶胸決眦の文には希臘の大家ソフオクレエス、オイリビデエス、エスキュロス Sophokles, Euripides, Aeskylos の伝奇あり。穠麗豊蔚の文には佛蘭の名匠オオネエ、アレキイ、グレキル Ohnet, Halévy, Gréville の情史あり。ダンテ Dante の神曲 Comedia は幽默にして恍惚、ギョオテ Goethe の全集は宏壯にして偉大なり。誰か來りて余が樂を分つ者ぞ」と書き留めている。

帰国が近づいた頃にはなんと450冊にも上るヨーロッパ文学を読破しており、ドイツ語を通して、ヨーロッパの文化遺産を心の素養にした。鷗外が読んだものの中でも特にお気に入りだった、P.ハイゼ（Paul Heyse）、H.クルツ（Hermann Kurz）共編『ドイツ短編集』（Deutscher Novellenschatz, 1871-76）全24巻は、帰国後の創作活動における地盤にもなったものだが、夜間の三ヵ月で読破したと言われている。鷗外は自らの努力と才能によって「文化

人」に変身していき、ゆくゆく翻訳者となる基礎知識も培った。

日本に帰った鷗外は、再びドイツに来ることはなかったが、帰国後も新聞や書物を通して常にドイツの最新事情に触れていたし、帰国直後からすぐにジャーナリズム的な活動を開始し、軍医として勤務しながらも、ドイツで学んだことや新しく知ったことを紹介し、伝える努力を絶え間なく行っていた。そのため、陸軍の上司の不興を買うことも、しばしばあったようだ。

演劇について

鷗外は自分自身を、永遠の不平家で、生まれながらの傍観者であると言っているが、ひとりの「観客」として——比喩的表現ではなく、本来の「観客」と言う意味で——ドイツ滞在中の鷗外はたしかに、あらゆるジャンルの劇を観る機会を逃さない人だった。ザクセン軍の秋の演習に参加したときには地元の村人たちによる演劇を楽しみ、戯画化した日本を舞台としたエキゾチックなオペレッタ「ミカド」(Mikado)も鑑賞している。そうした中でも、脚本の内容に重きを置いた古典劇に最も魅力を感じていたようだ。たとえばドレスデンでは「ファウスト 第一部」(Faust I)、ミュンヘンでは「クリュタイムネストラ」(Klytaemnestra)、ベルリンのドイツ劇場では「ドン・カルロス」(Don Carlos)、同じく当時の王立劇場では「ハムレット」(Hamlet)を観たという記録もあり、また『獨逸日記』の記述からも、鷗外が演劇に詳しく、多くの作品を実際に観劇したほか、劇場には足を運んでいなくても原作を読んだり、少なくとも新聞の批評に目を通したりしていたことが分かる。当時、ドイツの劇場で最も頻繁に上演されていたのは、ノルウェー劇作家イブセンの作品だった。

ドイツ滞在中に出会ったヨーロッパの演劇を、自由な芸術的表現として、日本にも普及させたいと考えた鷗外は、帰国後、シェイクスピア全集の翻訳家としても有名な、作家・劇作家の坪内逍遙とともに演劇改良運動に取り組んだ。

こうして鷗外は1889年(明治22年)、カルデロンペドロ・カルデロン(Pedro Calderón de la Barca, 1600-1681)による戯曲「調高

ギタルラノヒトフシ 矣洋弦一曲」(原題「サラメアの司法官」、スペイン語: *El alcalde de Zalamea*, ドイツ語訳: *Der Richter von Zalamea*)を弟の森篤次郎(三木竹二)と共に翻訳。翌年1890年(明治23年)にはレッシング(Gotthold Ephraim Lessing)の悲劇「エミーリア・ガロッティ」(*Emilia Galotti*)の翻訳を「折薔薇」という邦題で発表するが、どちらの戯曲も上演には至らず、日本の演劇界がこうした戯曲を舞台で演じるようになるまでには、実に20年もの時を必要とした。

このように鷗外は劇の翻訳を通して、世紀の変わり目に西洋演劇の日本への導入と実験に力を注いだ。小山内薫と歌舞伎俳優の市川左團次(二代目)が結成した「自由劇場」、ならびに近代劇協会による日本の新劇史の夜明けは、鷗外の翻訳なしには考えられない。

西洋演劇の普及において、鷗外が貢献した事柄の中でも、演劇史上最も大きな貢献と見なされているのが、イブセン(Henrik Johan Ibsen)の「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」(*John Gabriel Borkmann*)の翻訳であろう。この作品は1909年(明治42年)、自由劇場により有楽座にて上演され、日本と世界の演劇文化を結びつけた転機となった。

また、坪内逍遙から助言を得て、口語体で翻訳した鷗外の「マクベス」(*Macbeth*) (1913年)は、難解な台詞回しが続く場面も、洗練された簡単な熟語で無駄なく表現されていると、多くの読書家から高い評価を受けた。戯曲「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」(*Gütz von Berlichingen*)の翻訳(1912・13年)は読み物にとどまったが、鷗外による「ファウスト 第一部」は1913年(大正2年)に上演され、知人や友人を含め、多くの人に絶賛された。

その他の戯曲翻訳で、現在でもドイツで上演されている作品には、レッシングの「フィロータス」(*Philotas*) (1892・93年)やハウプトマン(Gerhart Hauptmann)の「寂しき人々」(*Einsame Menschen*) (1911年)があり、また晩年の1921年に発表した戯曲集『獨逸新劇篇』や、翌22年には第2巻として発表した『壘太利劇篇』(森林太郎訳文集)がある。鷗外が訳した戯曲の約半数、45点の作品が一幕物で、どの翻訳にも、舞台化するときのために、西洋文化のにじみ出た作品をどうしたら詩的に、分かりやすく表現できるか、鷗外からの短いアドバイスが添えられている。

鷗外は様々な作家の翻訳に取り組んだが、鷗外が書翰の

やり取りをしたことが明らかになっているドイツ語圏の作家はフーゴ・フォン・ホフマンスタール (Hugo von Hofmannstahl) のみである。フランクフルトの自由ドイツ司教座財団 (Freies Deutsches Hochstift) には、「オイディプスとスフィンクス」(Ödipus und die Sphinx; 鷗外の付けた邦題は「謎」) の日本語訳の出版を知らせた1914年5月27日付の書翰が保管されているが、ヨーロッパの作家と鷗外間の書翰はドイツでも日本でも、これ以外に残されていない。

音楽について

「鷗外」の名を耳にしたときに、「音楽」という言葉が心に思い浮かぶ人は、それほどいないだろう。実際、鷗外は楽譜も読めなかったが、音楽の素養が全くなかったわけでもなく、ライブツィヒでは合唱隊に加わって歌っていたそうである。また彼の作品の中でも、リヒャルト・ワーグナー (Richard Wagner) が若者たちのポップスターであったと述べており、ヨーロッパの芸術や文化について紹介したコラムでは、当時ヨーロッパで公演を行ったほとんどの作曲家について報じている。

東京大学総合図書館には鷗外が生前に所有していた蔵書が鷗外文庫として今でも保管されているが、推定2500冊に上るドイツ語およびその他のヨーロッパ言語で書かれた書物に混じって、鷗外直筆の書き込みがあるオペラの公演プログラムや、数多くのオペラ台本などもあり、鷗外がかなりのオペラ通であったことが分かる。

グルック (Christoph Willibald Gluck) の「オルフェオとエウリディーチェ」(Orpheus und Euridike) は、鷗外が台本を翻訳したが、当初計画していた1914年(大正3年)には上演されなかった。その主な理由は、日本語訳を楽譜に嵌め込む作業が非常に難航したためだったと言われている。実際、鷗外訳の作品が日本国内で初めて上演されたのは、なんと2002年(平成14年)のことだった。その他の鷗外によるオペラ翻訳作品にはシェッフエル (Joseph Victor von Scheffel) の「ゼッキンゲンのトランペット吹き」(Der Trompeter von Säckingen) があり、同作品は2006

年(平成18年)に山形県長井市で初演されたのち、日独交流150年への参加事業として2011年(平成23年)、埼玉県で再上演された。

鷗外による翻訳作品の中で、多くの人に読まれているものの中に、ボヘミア系ドイツ人女性作家オシップ・シュービン (Ossip Schubin) の「埋木」(Die Geschichte eines Genies. Die Gabrizzi) (1890年) が挙げられる。これは自分の作品を盗まれた、ある作曲家の物語だが、原作と和訳版では異なる観点から作品を評価することができる。というのも、鷗外はこの物語をやすやすと翻訳し、それでいて読者は、聞き慣れないオーケストラ用語もまるで自分の目で見るといふようなものか想像することができ、香水の匂いが漂い、蠟燭の光が揺れる練習室で、楽器が奏でられるヨーロッパの練習風景を頭に浮かべることができるからだ。そしてまた、この小説を読むことによって読者は、クラシック音楽が西洋人にとってどんな意味を持ち、どのように社会的に認められているものであるかを理解することができる。つまりこの「埋木」という翻訳小説は、西洋音楽の表現を学ぶための入門書であり、西洋音楽を楽しむための作法を学ぶことのできるものでもあるのだ。

美術について

西洋の芸術と美学を日本に伝えることも、鷗外が芸術仲間とともに目指したことのひとつだった。夭逝した洋画家の原田直次郎との交流により、鷗外はミュンヘンでたびたび当時人気が高かった美術アカデミーのガブリエル・フォン・マックス教授 (Gabriel von Max) のアトリエを訪れている。ドイツ滞在中に鷗外は数々の展覧会や美術館を訪れ、批評にもまめに目を通していったようだ。鷗外は上田敏に、ベルリン国立美術館に展示されているアーノルド・ベックリン (Arnold Böcklin) やフリッツ・フォン・ウーデ (Fritz von Uhde) の作品を見るように薦め、ベルリン分離派創立者のマックス・リーバーマン (Max von Liebermann)、ロヴィス・コリント (Lovis Corinth) などについて報じた。エドゥアルト・フォン・ハルトマン (Eduard von Hartmann) の『審美論』(Die Philosophie des



97 ドレスデンで撮影された森鷗外(左) : Dr. G. ヴィルケ (Wilke) (右)、ロシアあるいはフィンランド出身の医者 F. ヴァールヴェルグ (Wahlberg) (中央) [文京区立森鷗外記念館所蔵]



98 森鷗外「文づかい」に掲載された原田直次郎の挿絵 [森鷗外記念館(津和野町) 所蔵]

Schönen) を一部翻訳し、ドイツ美学についての講演を行い、東京に戻ってからは、陸軍勤務のかたわら東京美術学校(現、東京藝術大学)で美術解剖学の講師を務めた。1910年(明治43年)には短編小説『花子』の中で、彫刻家オーギュスト・ロダン(Auguste Rodin)を、芸術家として、またひとりの人間として紹介するだけでなく、ロダンが彫刻のモデルにした日本人女優・太田花子の名を後世の人々の記憶にとどめた。軍医総監へと昇進した鷗外はさまざまな委員会に招かれるようになり、1907年(明治40年)から数年間、美術審査委員会の審査員を務め、1908年(明治41年)には、のちに鷗外が初代院長を務めることになる帝国美術院(美術審査委員会を発展させたもので、のちに帝

国芸術院をへて現在は日本藝術院となる)の創立に向けて準備を始めた。1910年にはイタリアにて開催される万国博覧会のための美術品鑑査委員を務め、1911年には美術審査委員会第二部(洋画)主任に就任、世を去るまで多くの審査員らに助言を与えた。

文学作品の翻訳について

近現代の日本において、鷗外が最も偉大な翻訳家のひとりであったことに疑いの余地はないだろう。60歳でこの世を去るまでの間に、鷗外は130点にも及ぶ文学作品を日本

が進むべき方向に多少なりとも影響を与えたことは間違いない。芥川龍之介、佐藤春夫、木下杢太郎、谷崎潤一郎、三島由紀夫といった作家たちには、鷗外の影響が色濃く現れており、シュニッツラーの『アンドレアス・タマイアーの最後の手紙』(Andreas Thalmeyens letzter Brief) とリルケの二つのテキストも載せているヨーロッパの小説集『諸國物語』(1915年)について佐藤春夫は、鷗外作品は彼らの世代にとって、自然主義の呪縛を解き、若い作家たちに自分の道を進めと鼓舞する指導書のようなものと述べている。

鷗外は翻訳家、作家として影響を与えただけでなく、現代の日本語を作り上げた創造者のひとりでもあった。たとえば、飛行機という日本語は、鷗外が外国語から訳し、考えたものである。今度飛行機に乗ることがあったら、ぜひ鷗外のことを思い出してみていただきたい。

椋鳥通信 (第二回以降「むく鳥通信」)

鷗外という人物を紹介するにあたって、書かなければならないことは山ほどあるが、ここでもう一つ紹介したいのが、鷗外全集の中ではあまり注目されることがない第27巻の内容だ。この巻には鷗外が雑誌『スバル』に55回に渡って寄稿したコラム「椋鳥通信」が収められており、1909年から第一次世界大戦が始まる前まで、鷗外はベルリン、ケルン、フランクフルトの各地方紙などから得た情報を紹介していた。これは、鷗外が面白いと思ったものを社会に発信する当時のブログのようなものと言えるかもしれない。

無作為に「椋鳥通信」を読むと、意外な驚きに出会う。たとえば、ゴッホ、フロイトなど、当時の重要人物の名前を初めて日本に伝えたのも鷗外だった。文化の橋渡しにおいて、その早さに贈られるような賞があれば、鷗外は間違いなく受賞している。

1909年にイタリアを中心として起こった「未来派」は、鷗外のおかげで、そのコンセプトが日本で理解されるまでに1ヵ月程度しかかからなかった。マリネッティ(Filippo Tommaso Marinetti)の「未来派宣言」は2月20日にパ

リの『フィガロ』(Figaro)誌上で発表されたが、鷗外の上記通信の記載によれば、1909年3月12日にはそれを訳し終えており、日本の読者は「椋鳥通信」の第5号(同年5月1日発行)で、マニフェストを読むことができた。

現在に至るまで、ドイツの文化をテーマとし、日本の知識人にも広く読まれたジャーナリスティックな長期連載コラムで「椋鳥通信」の右に出るものはないだろう。「椋鳥通信」が社会に与える影響を、鷗外も過小評価しておらず、最新情報を伝えるとともに、そこは鷗外の意見を主張する場でもあった。

舞姫

日本で鷗外について質問をすると、いつの間にか話の内容が1890年の処女作『舞姫』にすり替わってしまう、ということがよくある。『舞姫』は、鷗外の商品の中でも、ベルリンを舞台にした代表的な小説である。第二次世界大戦後に日本で高等教育を受けていれば、誰しも一度は触れたことのある作品が『舞姫』だ。

「模糊たる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力とを持ちて」、ヨーロッパの大都市にやって来た青年は、貧しい踊り子のエリスと恋に落ち、やがて離れたい仲となる。しかし、自分の能力を祖国に役立てるため、彼女との別れを決断したときには、恋人エリスは既に彼の子供を身籠っており、主人公は彼女とお腹の中の子供を残して帰途につく。

この物語の内容は幾分か鷗外自身の自伝的な性格も持ち合わせているため、フィクションの部分が事実と受け止められてしまうことがしばしばある。日本のメディアは、帰国した鷗外を追って来日した、舞姫「エリス」のモデルとなったとされる女性エリス・ヴィーゲルト(Elis Wiegert)探しを昔から好んで話題に取り上げ、『舞姫』の歴史的背景や古文体の文章を理解することは今日では難しくなっているにも関わらず、ベルリンが今でも多くの日本人にとって、『舞姫』の舞台として記憶されることに一役買っている。ベルリンを訪れる多くの日本人はロマンを追い求め、1984年(昭和59年)に開館したフンボルト大学附属森鷗外記念館を訪れる。ただ、鷗外が亡くなった当初の1922年(大正

語に訳した。鷗外はヨーロッパで評価されている作家の作品を、ドイツ語のテキストをもとに翻訳し、紹介した。カルデロン、ワイルド (Oscar Wilde)、ストリンドベルヒ (August Strindberg)、フロベール (Gustave Flaubert)、ドーデ (Alphonse Daudet)、メーテルリンク (Maurice Maeterlinck)、トルストイ (ドイツ語表記: Lew Tolstoi)、ツルゲーネフ (ドイツ語表記: Iwan Turgenew)、ダンヌンツィオ (Gabriele D'Annunzio) などがそれにあたるが、鷗外が翻訳を手がけた60人を超えるドイツ語圏の作家の中には、今日では忘れ去られてしまった人々も多く存在する。彼らは、現れてはすぐ消える星屑のような作家だった。中にはF.W.ハックレンダー (F.W. Hackländer) や、先の音楽の項でもふれたオシップ・シュービン (本名アロイジア・キルシュナー、鷗外がベルリンに滞在していた当時、ベルリンで文学サロンを開いていた) のような当時のベストセラー作家もいたが、鷗外の留学時代を代表し、後世に残る作家のフォンターネ (Theodor Fontane) とシュトルム (Theodor Storm) の作品に、鷗外は何故か取り組まなかった。

鷗外が翻訳を手がけた作家の半数は現在においてもドイツ文学・戯曲における権威であり、その多くは、クライスト (Heinrich von Kleist) やE. T. A. ホフマン (E. T. A. Hoffmann)、レッシング、デーメル (Richard Dehmel) のように、日本の独文学者らが取り組む前に、鷗外によってもたらされたものだった。中でもクラブント (Klabund) の詩の訳は、人々が日本人の詩だと長いこと思い込んでいたほど完成されたものだった。ヘルダーリン (Friedrich Hölderlin) という作家を初めて紹介したのも鷗外で、それ以外にもシュニッツラー (Arthur Schnitzler)、リルケ (Rainer Maria Rilke)、ハイネ (Heinrich Heine)、ハウプトマン、ヴェーデキント (Frank Wedekind) の作品を訳し、こうした作家の経歴紹介、作品の解説もしている。

鷗外が夜間に訳したこれらの作品は、語学力をさらに高める練習目的でもあったのだろうが、そこには彼の個性と世界観が現れている。1907年に陸軍軍医総監・陸軍省医務局長に就任し、1909年には文学博士 (Dr. phil.) を授与された鷗外であったが、彼の例えばヴェーデキント、ハウプトマン、メーテルリンクの翻訳は、1910年から始まった『朝日新聞』の「危険なる洋書」という評論で槍玉に挙げら

れた。文化の橋渡しも常に平和裏に行われるものではなかったことが窺えるだろう。

鷗外はよく「日本のゲーテ」と言われたりするが、それは彼が学問、芸術、哲学を身に着けた人物であるからだけでなく、その人間性にも理由がある。独文学者の木村謹治は、ゲーテをいち早く日本に紹介した鷗外について研究したが、その成果はドイツ語でも発表されている。鷗外が友人らとともに訳した最初の詩集は『於母影 (おもかげ)』(1889年)で、レーナウ (Niklaus Lenau)、ケルナー (Justinus Kerner)、ハイネ、バイロン (George Gordon Byron) などのロマン派の詩をさまざまな文体で訳すことに挑戦し、中でも有名になったのはゲーテの「ミニヨンの歌」(Mignon)「君よ知るや南の国。レモンの木は花咲き……」だった。

ゲーテの詩「野ばら」(Heidenröslein)も1890年に鷗外がはじめて翻訳している。現在、日本人の殆ど誰もが口ずさむ詩は、残念ながら鷗外が翻訳したものではないが、彼が初めて日本に紹介したということ、そしてドイツ人よりも、日本人の方がよほどよく知っているということは、面白い現象であるといえよう。1889年に鷗外はゲーテの青春小説『若きウェルテルの悩み』(Die Leiden des jungen Werthers)の一部分、主人公ウェルテルが書いた1771年7月16日の手紙を口語体に訳して紹介したが、小説全体の翻訳は、後進の翻訳家たちの手にゆだねた。

ライプツィヒのレストラン、アウアーバッハス・ケラー (Auerbachs Keller) の壁には、井上哲次郎に『ファウスト』を翻訳することを約束した若き鷗外と、その約束を果たした1913年の鷗外が描かれている絵がある (図版94)。鷗外はまだ日本語に訳されていなかったゲーテの『ファウスト』第一部及び第二部を、夜間の時間だけを利用してたった半年で翻訳している。作中に登場する「トゥーレの王」(Der König von Thule)の詩などは、のちの翻訳者たちも鷗外の訳をそのまま採用するほど、完璧なものだった。

鷗外が与えた影響

鷗外による翻訳作品の言葉と内容が、次世代の作家たち

11年)の新聞には、どこにも鷗外の作品『舞姫』に関する記載はなかったし、高等学校の国語の教科書の必修教材になったのも第二次世界大戦後のことだということを申し添えておこう。

鷗外の多岐に亘る功績と文化の橋渡しは、未来においても学問に貢献していくことは確かである。しかし、運命の皮肉だろうか？ ドイツ文化と文学の天才的な橋渡し役として活躍した明治の文豪であった鷗外が、多くの人々に記憶されたのは、彼が一人のドイツ女性を愛でたということだった。ドイツでは、鷗外の数多くの作品のうち『舞姫』、『獨逸日記』、『雁』の3作が今のところ一般の書店で手に入れることのできるものだ。

参考文献

- ◆井戸田総一郎『演劇場裏の詩人 森鷗外 若き日の演劇・劇場論を読む』慶應義塾大学出版会、2012年
- ◆川村二郎『日本語の世界 15 翻訳の日本語』中央公論社、1981年
- ◆小堀桂一郎『若き日の森鷗外』東京大学出版会、1970年
- ◆中村ちよ『ドイツ時代の鷗外の読書調査』(『日本文学研究資料叢書 森鷗外』有精堂、1970年)
- ◆長島要一『森鷗外の翻訳文学』至文堂、1993年
- ◆星野慎一『ゲーテと鷗外』潮選書、潮出版社、1975年
- ◆山口徹『鷗外「椋鳥通信」全人名索引』翰林書房、2011年
- ◆山崎一穎(編著)『Spirit 森鷗外 作家と作品』有精堂出版、1987年
- ◆山崎一穎『日本の作家 36 二生を行く 森鷗外』新典社、1991年
- ◆山崎國紀『森鷗外を学ぶ人のために』世界思想社、1994年
- ◆山崎國紀『評伝 森鷗外』大修館書店、2007年

(訳:ケラー佑子)

番号	論文名	資料名	所蔵先
		93 Baelz während des russisch-japanischen Krieges im Kreise der höchsten japanischen Militärärzte, 1904・05 日露戦争時に撮影されたベルツと日本の高位の軍医、1904・05年	Stadtarchiv Bietigheim-Bissingen ビーティヒハイム = ビッシンゲン市立図書館
2.10	森鷗外と独日文化の橋渡し 役 (ペアーテ・ヴォンデ)	94 Volker Pohlenz, „Mori Ôgai erinnert sich an den 27. Dezember 1885 in Auerbachs Keller“, 2009 フォルカー・ポーレンツ「森鷗外のアウアーバッハス・ケラーでの1885年12月27日の回想」2009年	Auerbachs Keller (Leipzig) アウアーバッハス・ケラー (ライプツィヒ)
		95 『舞姫』の直筆の原稿 (複製)	Humboldt-Universität zu Berlin, Mori-Ôgai-Gedenkstätte フンボルト大学ベルリン森鷗外記念館
		96 Mori Ôgai mit japanischen Medizinern in Berlin, 1888 森鷗外と医者と同僚、ベルリンにて、1888年	Humboldt-Universität zu Berlin, Mori-Ôgai-Gedenkstätte フンボルト大学ベルリン森鷗外記念館 (© MOG Berlin / 山根寿代)
		97 ドレスデンで撮影された森鷗外	文京区立森鷗外記念館
		98 『新著百種』第12号 (明治24年1月28日発行) 森鷗外「文づかい」に掲載されている原田直次郎の挿絵	森鷗外記念館 (津和野町)
2.11	ドイツにおけるジャポニスム 芸術と好奇心の間にある 日本への熱狂 (ペーター・ バンツァー)	99 Carl Wuttke, „Kirschblüte in Ueno“, Öl auf Leinwand auf Karton, 1898 カール・ヴットケ「上野の桜」油彩画、1898年	個人蔵
		100 Adolph Menzel, „Japanische Näherin-In der japanischen Bude“, Aquarell, 1887 アドルフ・メンツェル「日本のお針子、日本の売店にて」水彩画、1887年 [Inv.-Nr. MGS 3829A]	Museum Georg Schäfer, Schweinfurt ゲオルグ・シェーファー美術館 (シュヴァインフルト)
		101 Adolph Menzel, „In der japanischen Bude“, Aquarell, 1887 [Sammlung Merz] アドルフ・メンツェル「日本の売店にて」水彩画、1887年 [メルツ・コレクション]	Kunstmuseum Liechtenstein, Vaduz リヒテンシュタイン美術館 (ファドゥーツ)
		102 „Der Mikado oder die drei Proben. Japanisches Zauber Märchen in fünf Akten“, Esslingen & München, J. F. Schreiber, 1890 Papiertheater mit Figuren 「ミカドあるいは三つの課題。五幕物の日本のおとぎ話」J. F. シュライバー社、エスリンゲン・ミュンヘン、1890年、紙製の人形劇場	Helmut Wurz ヘルムート・ヴルツ
		103 „Der Mikado oder die drei Proben. Japanisches Zauber Märchen in fünf Akten“, Esslingen & München, J. F. Schreiber, 1890 Kulisse des Theaters 「ミカドあるいは三つの課題。五幕物の日本のおとぎ話」J. F. シュライバー社、エスリンゲン・ミュンヘン、1890年、紙製の舞台背景	Helmut Wurz ヘルムート・ヴルツ
104 „Der Mikado oder die drei Proben. Japanisches Zauber Märchen in fünf Akten“, Esslingen & München, J. F. Schreiber, 1890 Papierfiguren 「ミカドあるいは三つの課題。五幕物の日本のおとぎ話」J. F. シュライバー社、エスリンゲン・ミュンヘン、1890年、紙人形	個人蔵		

執筆者・翻訳者一覧

(五十音順)

青柳 亮子 (AOYAGI, Ryoko)

一橋大学社会学部・同大学院社会学研究科博士後期課程中退。専攻は教育社会学・教育思想史。2004年よりマンハイム大学経営学部にて日本語講師を務める傍ら、ピアノ、パイプオルガン、チェンバロ奏者として、マンハイムおよび周辺で合唱コレペティトウ、声楽伴奏、室内楽などの分野で活動中。

石田 勇治 (ISHIDA, Yuji)

京都市生まれ。東京外国語大学卒業、東京大学大学院社会学研究科（国際関係論）修士課程修了、マールブルク大学社会科学哲学部 Ph. D. 取得、東京大学講師・助教授を経て2005年から東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻はドイツ現代史・ジェノサイド研究。この間、ベルリン工科大学客員研究員、ハレ大学客員教授。

内田 賢太郎 (UCHIDA, Kentaro)

1985年東京都生まれ。現在、慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程在籍中。専門はドイツ文学、比較文学。特に二十世紀のドイツ思想及び文芸を、エルンスト・ユンガーを中心に研究中。「接近と凝視」（『藝文研究』100号）、「ユンガー、バタイユ、マッソン」（『ヘルダー研究』18号）など。

ヴァールラーヴェンス、ハルトムート (WALRAVENS, Hartmut)

1944年生まれ。中国学、満州学、民族学専攻。ベルリン国立図書館に勤務。International ISBN Agency 理事（2006年まで理事長）。

ヴィッピヒ、ロルフ＝ハラルド (WIPPICH, Rolf-Harald)

1950年ドイツ・オブラーデン生まれ。1974年から1985年までケルン大学で歴史学、哲学、政治学、民族学を専攻。1890年代のドイツの対日政策に関する学位論文で1985年に博士号取得。ケルン、東京で大学教員を務め、上智大学教授（2011年退官）。ドイツの極東政策や日独関係に関する論文多数。

ヴォンデ、ベアーテ (WONDE, Beate)

1954年ドイツ・グーベン生まれ。1973年から1978年までフンボルト大学ベルリンで日本学、英文学を専攻。1979年から1981年まで早稲田大学に留学。1981年から1987年までフンボルト大学ベルリン助手。1984年ベルリン森鷗外記念館設立以来、多種多様な活動を通して鷗外の紹介に努める。現職、副館長。2006年 JaDe-Preis 受賞。2008年に記念館が外務大臣賞受賞。

エシュケ、トビアス・エルンスト (ESCHKE, Tobias Ernst)

1976年生まれ。近現代史、経済・社会史、経済学をフライブルク大学、ハーバード大学で学び、2006年に修士号取得。現在、フライブルク大学歴史学科博士課程在籍。

江面 快晴 (EZURA, Kaisei)

神奈川県横浜市生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科単位取得退学。ドイツ学術交流会奨学金を受けて2010年よりギーゼン大学でドイツ戦後文学を研究。テーマはウーヴェ・ヨーンゾンの作品の語り手と聞き手の関係に見る物語の構造。

小田 博志 (ODA, Hiroshi)

1991年大阪大学大学院人間科学研究科修士課程修了、2001年博士号取得 (Dr. sc. hum., ハイデルベルク大学)。現在、北海道大学大学院文学研究科准教授。専門は人類学。ドイツと関係地域をフィールドに、戦後および植民地後和解をテーマに調査をしている。主著に『エスノグラフィー入門——〈現場〉を質的研究する』（春秋社、2010年）、「難民——現代ドイツの教会アジール」春日直樹（編）『人類学で世界をみる』（ミネルヴァ書房、2008年）などがある。



日独交流150年の軌跡



日独交流史編集委員会 編

ペーター・パンツァー（ボン大学名誉教授）
久留島浩（国立歴史民俗博物館教授）
保谷 徹（東京大学史料編纂所教授）
箱石 大（東京大学史料編纂所准教授）
宮田奈々（オーストリア国立アカデミー近現代史研究所客員研究員）

後援／ドイツ連邦共和国大使館

フロイデンベルク社 NOK株式会社

協力／公益財団法人日独協会 独日協会連合会

A4判変型 274×220mm 上製 360頁 本文フルカラー

図版234点 52論文 ISBN 978-4-8419-0655-4

定価 **3,990円** (本体3,800円)

10月
刊行



オイレンブルク伯爵肖像



青木周蔵と娘、孫娘



日本とドイツは国交樹立150周年を迎えた。プロイセンのオイレンブルク伯爵と江戸幕府が修好通商条約を結んだ1861年以降、日本とドイツには、友好関係を物語る多くの史実がある。ドイツに留学した森鷗外、外交官でドイツ人女性と結婚した青木周蔵、日本の近代医学の父といわれるエルヴィン・ベルツ。明治維新後の日本はドイツを近代化のモデルとし、世界の列強に負けない国を作ろうとした。その後の第一次世界大戦中には

両国は敵味方になったが、ドイツ人俘虜と日本人の間に生まれた温かい交流から、多くの技術が伝えられた。本書はこうした日独の150年に亘る長い歴史を、豊富な写真や絵画とともに通観する。

は両国は敵味方になったが、ドイツ人俘虜と日本人の間に生まれた温かい交流から、多くの技術が伝えられた。本書はこうした日独の150年に亘る長い歴史を、豊富な写真や絵画とともに通観する。



森鷗外（左）



杉原千畝



第1章 日独交流の嚆矢

オイレンブルク使節団と日独関係の樹立……ペーター・パンツァー
 將軍への贈り物——徳川記念財団所蔵のプロイセン王立磁器製作所
 (KPM) 製リトファニーについて……中村尚明
 プロイセンにおける竹内使節団——ドイツの地を踏んだ最初の日本人
 ……ロルフ＝ハラルド・ヴィッピヒ
 ハンザ諸都市と日本……レギーネ・マティアス
 戊辰戦争とプロイセン……箱石 大
 第一次世界大戦以前の独日貿易……カティア・シュミットポット

第2章 日独交流の黄金時代

日独関係の「黄金時代」……スヴェン・サーラ
 ドイツに目を開いた日本——エッセンとベルリンにおける岩倉使節団
 ……久米邦貞
 青木周蔵——ドイツと日本の橋渡しをした外交官
 ……ニクラス・サルム＝ライファァーシャイト伯爵
 明治憲法の制定とドイツの影響……瀧井一博
 ヤコブ・メッケル少佐——お雇い外国人、プロイセン参謀将校
 ……トビアス・エルンスト・エシュケ
 行進曲と神々の煌めき——日本の西洋音楽の草創期におけるドイツ
 の役割……マティアス・ヒルシュフェルド
 自然科学と技術分野における日独の学問移転：第一次世界大戦まで
 ……エーリッヒ・パウアー
 ドイツを模範とした日本の医学……フランク・ケーザー
 エルヴィン・ベルツ——日本近代医学の父……スザンネ・ゲルマン
 森鷗外と独日文化の橋渡し役……ペアーテ・ヴォンデ
 ドイツにおけるジャポニスム——芸術と好奇心の間にある日本への
 熱狂……ペーター・パンツァー
 日本の俘虜収容所における青島の守備兵たち
 ……ゲルハルト・クレープス
 明治日本はドイツだけを手本としていたのか
 ……ハインリヒ・ゼーマン

第3章 学術交流・日本研究

ドイツにおける日本学・日本研究……ヴォルフガング・サイフェルト
 ヴァレニウス、カロン、ケンペル——シーボルト以前にヨーロッパ
 における日本理解を深めた人々……デアートレフ・ハーバーラント
 フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトと日本開国への影響
 ……コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン
 ルール大学ボーフムのシーボルト・アーカイブズ
 ……レギーネ・マティアス
 呉秀三のシーボルト研究……宮坂正英
 世紀転換期の日本人によるドイツ像——1900年から1902年のベル
 リンにおける巖谷季雄……ハルトムート・ヴァールラーヴェンス
 日独学術交流の再出発——2人のノーベル賞受賞者 アルベルト・
 アインシュタインとフリッツ・ハーバー……エーリッヒ・パウアー

ドイツ東洋文化研究協会 (OAG)
 ……スヴェン・サーラ/クリスティアン・W. シュバング/ロルフ＝ハラルド・ヴィッピヒ
 グラツ民族学博物館所蔵の徳川家の能面——旧ドイツ東洋文化研
 究協会コレクション……トム・グリグル
 ボン大学日本・韓国研究専攻所蔵のトラウツ・コレクション
 ……ラインハルト・ツェルナー

第4章 ヴェルサイユ条約から第二次世界大戦まで

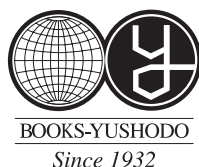
両大戦の間——ヴェルサイユ条約から日独同盟、そして総力戦へ
 ……テオ・ゾンマー
 第一次世界大戦後のドイツ国境画定問題と日本委員……宮田奈々
 ヴィルヘルム・ゾルフ——第一次世界大戦後の初代駐日ドイツ大使
 ……フランク・ケーザー
 ハンス・パーシェと日本——国境を越えたつながりの物語……小田博志
 ドイツ哲学と近代日本……平山 洋
 ドイツ語が輝いたとき——大正昭和戦前期の旧制高等学校における
 ドイツの言語と文化の影響……田中祐介
 日本から見た防共協定……田嶋信雄
 1939年の「柏林日本古美術展覧会」について——開催経緯と日独
 双方の思惑……安松みゆき
 「武士の娘」(邦題：新しき土)——日独合作映画で交わる芸術とブ
 ロバガンダ……ジャニーヌ・ハンセン
 リヒャルト・シュトラウス——大管弦楽のための日本の皇紀
 二千六百年に寄せる祝典曲……イングリッド・フリッチュ
 杉原千畝とユダヤ人迫害問題——反ユダヤ人種政策への同調を拒否
 した日本……ハインツ・エーバーハルト・マウル

第5章 戦後の日本とドイツ

迎ってきたのは同じ道のりか——第二次世界大戦後のドイツと日本、
 その復興の歩み……ハインリヒ・ゼーマン
 「過去の克服」——ドイツと日本を分ける要因……石田勇治
 コンラート・アデナウアーの訪日——政治と文化の視点から見たあ
 る旅の記録……ホルガー・レット
 日本とドイツ民主共和国 (1973-1989年) ……ペーター・パンツァー
 日独関係の歴史と日独協会の歩み……黒川 剛
 雨天の友——独日協会と協会の課題……ルブレヒト・フォンドラン
 ドイツにおける日本の武道の伝播と育成……ダヴィッド・ベンダー
 マンガに見る「ドイツ」——パロディ・ツールとしての役割
 ……ジャクリヌ・ペルト

第6章 未来へ

将来の日独アジェンダに取り上げるべきものは何か
 ……ルブレヒト・フォンドラン
 財団法人ベルリン日独センター……フリデリケ・ボッセ
 日本とドイツ——学術・科学技術協力……ハンス＝エルク・シュテーレ
 日本とドイツ——われわれの経済協力のための課題
 ……ユリア・ホルマン



株式会社 雄松堂書店

Home Page: www.yushodo.co.jp

本社：〒160-0002 東京都新宿区坂町27 Tel: 03-3357-1411 Fax: 03-3356-8730 E-mail: sales@yushodo.co.jp
 京都：〒604-8101 京都市中京区御池通柳馬場角 京都朝日ビルディング5F Tel: 075-222-0165 Fax: 075-256-2032
 E-mail: kb@yushodo.co.jp